昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可
昭和五十七年二月　十五日　発行（毎月一回・十五日発行）

慈光

第三十四巻　第二号
（通第三九一号）

歎異抄第二章……（1）
ただ念仏して……池山栄吉……（2）
信と人生……井上善右エ門……（6）
凡骨日誌抄（11）……西元宗助……（10）
念仏詩抄……木村無相……（14）
法味その折り〳〵……花田正夫……（17）

歎異抄第二章

おのおの十余箇国のさかいをこえて、身命をかえりみずしてたずねきたらしめたもう御こころざし、ひとえに往生極楽のみちをといきかんがためなり。

しかるに念仏よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんとこころにくくおぼしめしておわしましてはんべらんは、おおきなるあやまりなり。

もししからば南都・北嶺にもゆゆしき学生たちおおく座せられてそうろうなれば、かのひとびとにもあいたてまつりて、往生の要、よくよくきかるべきなり。

親鸞におきては「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」と、よきひとのおおせをこうむりて信ずるほかに、別の子細なきなり。

念仏はまことに浄土にうまるるたねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなり。たとい法然上人にすかされまいらせて、念仏して地獄におちたりともさらに後悔すべからずそうろう。そのゆえは、自余の行をはげみて仏になるべかりける身が、念仏をもうして地獄におちてそうらわばこそ「すかされたてまつりて」という後悔もそうらわめ、いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。

弥陀の本願まことにおわしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず。仏説まことにおわしまさば善導の御釈虚言したもうべからず。善導の御釈まことならば、法然のおおせそらごとならんや。法然のおおせまことならば、親鸞がもうすむね、またもてむなしかるべからずそうろうか。詮ずるところ愚身が信心におきてはかくのごとし。

このうえは念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからいなりと、云々。

ただ念仏して

池山栄吉

〝ただ念仏して〟という言葉は、聖人のよき人のおおせにきいたきわみであり、信の告白としてのかなめであり、また人に信をすゝめるおくのでもある。

この言葉を信への手引として受入れた人は、かず限りもないことであろう。私などもその一人である。この言葉に引込まれて、じゃ私もと急にまねる気になって断然声に出したのが、あのあこがれの信界への踏切であった。

今日我国では、津々浦々にいたるまで、念仏の声の響きわたっていない処はない。日本人であって、この聲を或は口にし、或は耳にした覚えのないものは、おさなごを除いては一人もあるまい。さすが大乗相応の日域、こうあるのに不思議はないが、他面、宇宙一切の事物はその涯しなき流転の相のうちに、鐘の音をさへ諸行無常とひゞかせて、遠く近く、裏に表に、人生の最大緊急の問題、たゞまことなる念仏への関心を唆らないものはない。

そも〳〵念仏は、救のためにあらわれた力の、その目指すものへの呼掛である。それをそれとも知らないで、うっかり聞きながす人の、あまりにも多きに過ぎるのは、まことに歎かわしい限りであるが、考えて見れば、憶劫にもものうあいがたい弘誓の強縁とあるからは、また怪しむべきではなく、寧ろたゞ聞いたというだけでも、その人と夫の力とをつなぐえにしの糸は、はやくも用意されたものと、看做されるのを多とすべきではなかろうか。

進んで念仏の意味を聞いたり、考えたり、とにかく口にしたりする段になっては、もう糸の端と端とが或る交叉状態になって動きつつあるのである。が、それがしっかり結び上げられる迄には、遅かれ速かれ若干の時を要するのが常で、その間には、深浅、強弱、方向の正否等の視点から、いろ〳〵の段階が認められ、さま〴〵の転化が行われる。

が、その中で、念仏のいわれを聞く事は聞いても、それについて多少の考慮を払っているというだけで、まだ実際念仏するという程に立ち至っていない一類と、念仏にある価値を認めて、兎に角念仏しつつある一類とでは、最後の目標のへだたりから見て、亀と兎の馳けくらべ、必ずしもどちらが先に行きつくとも限らないが、前者の前途なお遼遠なのに較べると、後者の地点からはもう山が見えている。念仏の出る出ないを界として、前者は単に素見の客であるのに反して、後者は既に謂はば力との直接交渉の圏内に立入ったものと見られる。

力との直接交渉は念仏を通じて行われる。その進捗の程度にも見方によっては矢張幾多の段階があり、転化もあろうが、特に際立ったそれの三つがある。念仏を目的達成の一助と見るのが其の一で、目的達成への努力の集点とするのが其の二。

念仏も棄てたものでないとか、念仏も結構役に立つとか、念仏は他の何物にも劣らないとか、それぞれの思惑に動機ずけられて、おのがじし、応分の力を持出して念仏に精進すると、その効験は争えないもの、多かれ少かれ或る法悦が感じられる。が困った事には、いつも柳の下には泥鰌が いるとは限らない。どうかするとさっぱり駄目な事がある。法悦の不連続性、これが其の一其の二の共通の徴候で、こうした徴候が存続する間は、まだ本当に念仏が手に入ったものでない。その関を越すには、今一度の転化に待たなければならない。日頃念仏を心にかけて扱ってはいるものの、どうもしっくり身につかない。どことなく拍子が抜けて、手持無沙汰の感を免れないのは、畢竟念仏を作善の具に供しようとするからである。我が手でまかなう資料として扱うからである。

念仏の一行にさえ及びがたい身であると知れては、地獄一定は免れない数と、焦燥の五里霧中に彷徨して、空しく指南の法輪を翹望する折柄、幸に宿善開発の時節到来、今までに覚えない響を念仏に聴取って、念仏は、救わんとする力から、力なきものへの呼びかけで、念仏する人から見れば、ただそれに応け答えをする迄のもの、つまり力そのものの発動のほか何でもないと心証する。これが転化のその三である。

念仏は余計なものとして作られたものでない。なくてはならないものである。と同時に、他の何物を以ても代えることの出来ないもの、従って単独行動は念仏本来の性分で、

念仏と外のものとの共動を策するのは、この絶対性への反逆であり、冒瀆である。念仏はただ惜しみなく奪うものの上にのみ、あまねくその全分を光被する。其の一其の二の念仏が、とかく坐りが悪かったのに、其の三に至って、俄かにぴったりおさまりがつくというのも、畢竟このゆえである。

念仏を聞き初めてから、惜みなく奪い終るまで、意識に上るにせよ上らぬにせよ、それからそれと常不断の過程を辿って止まない幾多の生成推移は、箇々の事象から見れば、或は桐一葉、或はいとし子の死、さては空中の声、縁の下の聴問など、千差万別、それ〴〵の機縁に由来するが、その原動の源にさかのぼれば、一に力のもよおしにかかると首肯かされる理由がある。念仏は自動する。念仏は自省を促し、自省は念仏の意義を深める。一方念仏の意義がいよいよ深く信知されるに従って、他方ます〳〵自己の何たるかが認識される。信知の深まりと自省の深まり、両者は相関的に働きかけて、交互に促進を競い合う。が、その実一つ楯の両面と謂うべきもの、結局帰命の一念に抱擁する傾向に働くのである。落着くところへ落着かせる。からくりの妙、たゞ〳〵不思議と呆れるの他はない。

念仏は招く〝一心正念直来〟と。念仏の心意気がよくこの言葉に現れている。今これを放浪の旅を続ける一人子の帰りを、ふるさとに待ち佗びる母の心に引き合わすことを許されるならば、直来をスグキテオクレヨと訓じ、一心正念にオネガヒダカラと仮名を振っても、そう見当を外れていまいと思う。オネガヒダカラスグキテオクレヨ、この哀々惻々の衷情が、相手の心に滲透し、感命した極促が、やがてそのまゝ内から滲み出る切々の帰心ともなり、〝念仏もうさんと思いたつ心〟ともなるのであって、この心境の変化こそは、力とその目的との間に、二度と解ける気遣いのない鞏い固い結びを仕上げるのである。

この新なる心境の湛える雰囲気は、〝たのもしさ〟を其の基調とする。〝たのもしさ〟は称えるものの心に残る余音であって、一度キャッチし得たら占めたもの、随時随所に再現して立消に帰するおそれのないのがその特徴である。固より人生の行路、愛欲名利の噪音の絶え間はないが、噪音の高まれば高まる程、冴えかえる念仏の中に、いよ〳〵つのる〝たのもしさ〟は念仏する者に絶えず繰返される体験である。此の立場から〝神を知ったと思っていた私は、神を知ったと思っていた事を知った。私の動乱は其所から芽生えはじめた〟とある有島武郎の述懐を聞けば、摂取の

心光の保証を缺く信知の儚さが思われて、転た同情に堪えないものがある。

或るルツター研究者の説に依ると、ルツターも亦その信の確立には随分苦労したものである。神を信じようとして信じ得ぬ悩み、これはルツターに取って、極重の罪悪としての自覚であった。神の有無を疑ったのではない。神に近づき親しむ気になれなかったのである。それはその筈、ルツターの心鏡に映じた神は、我々が観音菩薩に見るような、春風駘蕩の和やかさは気振にも見えず、秋霜烈日、閻魔大王のような凄じい相好の持主で、外に瞋嫌の焔を現じているばかりか、内にも情け容赦も荒々しさを攘いているとしか思えない。こうした神を信ぜよとは、光秀に対って飽く迄信長に信頼せよと強うると一般、無理な註文、出来ない相談をもちかけるというものである。この無理な註文に応じ、相談に乗るべく、隠忍自重、ややともすると攘げようとする抵抗の頭を自ら押えて、渾身の勇を鼓しつつ、我等の父たる神の肯定をめがけて精進したのが、ルツターの求道の過程で、悪戦苦闘の果、精も根もつきて到頭我を折つて参ってしまった処が、即ち、信の成立となったのであったが、それも一度こっきり梟がついたというのではない。その後もときどき抵抗の嵐、否定の浪が盛り返してくるたびごと、同様の奮闘が繰り返されなければならなかった、ということである。

こんな話を聞くにつけても、偲ばれるのは、念仏というもののあることのありがたさである。もし念仏というものがなかったなら、私達も恐らくこれと似たような動揺の悩を反復しなければならないであろう。それなしには生きられぬ。〃たのもしさ〃を伴れる念仏、〃もうさんとおもいたつこころ〃をきっかけに、念仏とはぐれる気づかいのない〃たのもしさ〃我が意気込みの強さでつかまえて離さないのではない。頼まれる力の方から絶えず供給して止まない念仏。聖人は私をこの念仏にひきあわせて下さった。筆に口に諸有方面から念仏の奥義を開闡して、鈍感な私にも、多少の〃たのもしさ〃を味得させて下さった。ほんに私に取って聖人は、空前にして絶後なる〃無碍の一道〃への最大一の案内者である。

信と人生

井上善右エ門

今日一般に信仰といわれている言葉は、仏教では信心というのでありまして、サンスクリットの原語ではプラサーダといいます。それは「清らかに澄む」という意味であり、天上の月が地上の泥水にも、その清らかな影をさながらに宿し映じるような状態を語る言葉です。通俗的に信仰という言葉が随分曖昧に用いられ、何か神秘的な事を鵜呑みに盲信することかのように思われていることが多いようですが、少なくとも仏教に関するかぎり決してそのようなものではありません。

現在、我々がたゞ物質的な身体的自己に執われて、迷うた生の観念の中で生きているところから、いろ〳〵な煩悩といわれる妄情が起こり、われ識らずその煩悩のとりこになるのでありますが、その自己の迷いと煩悩に苦しむことを機縁として、やがて自己の迷いに気づかされるときが来ます。自己の迷いに本当に気づくという事は、迷いを越えたものに照らされることによって可能であります。その自己を越えた絶対の真実こそ仏の光であり、教を聞くということ、即ち聞法とはその光に育てられ養われて、遂に迷いの闇が照らし出され、その光に摂め取られたときの状態が、先にいう信心なのであります。

迷いの闇が消えるのではありませんが、闇を闇と知らしめられ、その闇に仏心の光りが宿り映えるのであります。その時の心境を池山栄吉先生は「われならぬ清らのわれのわれにありて、穢悪のわれをわれに知らしむ」と詠われています。

かくて仏教における信とは、迷えるこの私を捨てたまわぬ宇宙的大慈悲心が、この私の心に来り宿って下さることでありますから、丁度葉末の露に月日が来り宿って輝くように、清く澄む光に貫ぬかれる身となるわけであります。才市老人が「ありがたいなあ　照らし抜かれて照らし取られて　ナムアミダブツ」とうたうているように、露のような果敢い身でありながら、仏心がやどり輝く身となるので

すから、世間通途の信仰という思いとは大きく相違することが明らかとなりましょう。

さてここで注意することは、このような仏心を決して我々の手で捉えるのではないということです。人間というものは、自分の力にどうしても期待するという性質がありますから、宗教的信心の状態を我が力で作り出せるものであるかのように、無意識に努めるものです。しかし人間というのは相対的な有様の世界に生きているのでありまして、如何に努力してみても、純粋にはなりきれるものではありません。蓮如上人の『御一代記聞書』に

皆人毎に善き事を言いもし働きもすることあれば、真俗ともにそれを我がよき者にはやなりて、その心にて御恩ということは打忘れて我が心本になるによりて、冥加に尽きて世間仏法ともに悪しき心が必ず〳〵出来するなり、一大事なり。

と云われています。

その意を一言で言いますと、たとえよい事をしても、必ず自分が為たという自負心がつきまとう。たとえ、それが無意識の自負心であっても、最早や純粋無垢とは云いえません。そこから別の汚れた思いが必らず出てくるというのです。

我々はその無意識の自負心からまぬがれえましょうか。

仏教で我々の為す善事を「雑毒の善」と云います。雑毒の善とは毒のまじった善という事ですが、反省してみると確かにそうであって、真に純粋清浄にはなり切りえない我が心であることが知られましょう。絶対の大慈悲心は純粋そのものであります。従ってこのような相対的な心で純粋無垢の仏心を真似ようとすることは錯誤であるといわねばなりません。

タゴールが次のように言っています。「我々は、様々なものを外から我が手でとって、それを我が所有とする。しかし宗教の世界は反対である。それは大いなる真実の只中に入り込んで、その真実に所有される身となることである」と言っていますが、宗教の本質をまことにあざやかに語っていると思います。

そうすると信の体験にあって、自己はどのような状態に立つのかというと、それは『歎異抄』に「たゞほれ〴〵と弥陀の御恩の深重なること常に思い出しまいらすべし。しかれば念仏も申され候。これ自然なり、わが計らわざるを自然とは申すなり、これ即ち他力にてまします」と語られてあるところに、言い尽くされているでありましょう。ただほれ〴〵と弥陀の御恩を仰ぐのみで、その外に何事もありません。己れは空でたゞさん〳〵と照らされて活動する自己がそこにあるのみであります。

さてこのような宗教的体験においては、その人の人生観や生活態度が、どのように変ってくるでありましょうか。その人の生活と無関係な信仰というものは、頭の中の画に過ぎないのであって、それは最早や宗教的には意味のないものであります。信はその人の精神的生命の根となるものでありますから、そこに現われる生活はそれのない生活とは必らず異って来ざるを得ないのです。即ち信の根から栄養を吸収して生命は成長し躍動するのです。この点からいうと信のないということは、根なし草のようなもので処定まらず、たゞ揺れ動くばかりという事になりましょう。何の為に生きているのやらわからず、たゞ生れてきたから生きているのであるならば、動物と同じ事でありましょう。人間は決してそのような生き方に満足出来るものではありません。

さて宇宙的な真実の光に浴する身となりますと、我執に鎖されていた心が自ずと開かれて、自己中心の思いに執われない広々とした魂の眼で、何事をも見る心が先ず開かれてきましょう。蓮如上人のお弟子に法敬坊順誓という人がありましたが、その人の言葉が次のように記録にとゞめられています。

常には我が前にては言わずして後言いうとて立腹するものなり。我はさようには存ぜず候。我が前にて申しにくくば、蔭にてなりとも我が悪しき事を申されよ、聞きて心中を直すべき由申され候。

以上の通りでありますが、これを現代語で言い換えてみますと、「世間一般には人が直接自分に云わないで、蔭口を言うといって腹を立てるものだが、自分にはどうもそうは思われない。面と向っては、なか〳〵言いにくいであろうから、蔭口でも自分に悪い点があったら言ってほしい。それを間接にでも聞いて、自分には気づかぬ悪い点を改めて、少しでもよくなりたい」と言う意味になります。これはなか〳〵大した言葉だと思います。なんと広々とした心でありましょう。こゝにこそ真に自分を大切にする生命が躍動しているのを感じます。それをあらしめるものこそ真実の法であり、その法の真実を我々におくりとゞける大悲心の結晶がナムアミダブツであります。その大悲の喚び声を聞き、仏心のやるせない大悲を領受するとき、法の真実が身のうち心のうちに滲透して下さるところに、今までかたくなに己れを閉鎖していた我執の氷が解けて、清らかな水となって流れ始める偉大な出来事が信心であります。

それはあくまで体験的なものであって、観念的なものではありません。我々の心は仏の真実によって開かれるべく用意され裏づけられているのです。何と有難い事ではありませんか。

あのドイツの偉大な詩人ゲーテが『ファウスト』の中で
霊の世界は鎖されたるにはあらず
汝の官能塞がり　汝の心情死せるなり
いざや学徒不退転の決意もて
俗塵の胸を曙の光に浴せしめよ
と語っている言葉も、深く強く頷かれるのであります。
（昭和五十六年十二月六日八時　短波放送）

―――◇―――◇―――

山頭火

波音のたえずしてふるさと遠し

ゆっくり歩こう萩がこぼれる

年とれば故郷こいしつくつくぼうし

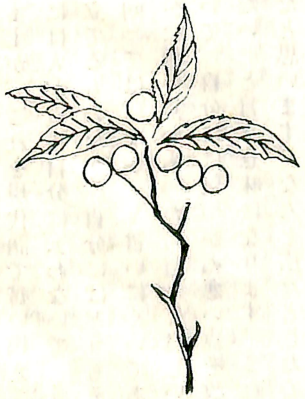
一きれの雲もない空のきびしさまさる

行き行きて倒れるまでの草の道

生死の中に雪ふりしきる

中村元氏の仏伝より

阿難が釈尊に最後の説法をお願いした時、
「阿難よ、修行僧は私に何を待望するであろうか。私は内外の区別なしにことごとく法を説いた。何ものかを弟子に隠すような教師の握拳は存在しない。
私は修行僧の仲間を導くであろうとか、或いは修行僧の仲間は私に頼っているとか思ったことがない。
阿難よ、私はもう老い朽ち、齢をかさね老衰し、人生の旅路通り過ぎ、わが齢は八十になった。譬えば古ぼけた車が革紐の助けによってやっと動いて行くようだ。
阿難よ、この世で自らを島とし、他人をよりどころにすな、法を島とし他のものをよりどころとせずにあれ」
と語られている。



凡骨日誌抄（11）

――大いなる命の流れ――

西元宗助

一、

あけまして、おめでとうございます。本年も亦、なにとぞ宣しくお願い申し上げます。
まず、案じております花田先生の御健康のこと、懸念されました手術も経過およろしく、年末にははやばやとご退院になりました。皆様と共に、そのことをまずお慶びしたいと存じます。なお先生の御入院中、津田よし子さんや鬼頭きよ子さんらから、いろいろお世話いただいたと承っております。ほんとうに有難うございました。
それにつけて思いますこと。この雑誌の寿命、あと、いくばくぞということです。遅かれ早かれ、臨終のときがやってまいります。それにしても、この雑誌、少しでも長持ちさせたいものです。そのためには、もう少し、先生のご負担軽減のことを考えてみる必要があります。現状は、編集は勿論、校正から発送から会計から、多分、ほとんど凡てを先生ご夫妻（奥さまも御病身）におんぶしています。相済まぬという気持と共に、おいたわしく思われてならない。

二、

旧臘十二月十三日（日）の、朝のＮＨＫ教育テレビ「宗教の時間」ご覧いただけた方もございましょう。〝名刹西本願寺を訪ねて〟のタイトルつきで、約四十分間、光照前門さまと対談させていただきました。実はあのビデオ撮りは十二月七日（月）の午後だったのです。
わたし今までいろんな先生がたと対談させていただいたことがありますので、その要領は一通りは心得ているつもりでした。即ち対談といっても、私はよく聞き役でありさえすればよいわけで、例えばＹ先生の場合などは、最初一つ発問してお伺いすると、もうそれで私の役目は半分終ったようなもので、あとはもう殆んど自動的で、これも話したいあれも話したいと平素思っていられることを、Ｙ先生は次から次へと話していかれるので、私はそれを適当に合

鎚をうちながら、先生のお話を、どのようにコントロールして、次の話題に転じていくかが私の役割で、そしてそれを正味五十八分程度の時間のわくの中に、どのように最後をうまくまとめ、しめくくるかが苦心のしどころであった。じじつY先生は非常な熱弁家であられて、このときの「宗教の時間」は、それなりに成功であったといわれた。

しかし、この度の場合は、その意味では少し勝手がちがいました。前門様におかれては、驚くべき程に自己抑制的—控え目でおありで、まことに要を得て適確に、しかもおおらかに簡潔にお答えになられるだけで、すこしでも、ご自分のことや、宗内のことを宣伝する、あるいは自慢しているかのような印象を与えることになると、極度にお言葉を慎しまれてしまう。だから、私はそれを補足するといえば云いすぎであるかもしれないが、何かひとことふたこと附け加えて聴視者に説明しなければならない。つまり私は聞き役でありつつも、いやでも応でも発言しなければならない。いやそれどころか、あなたのお考えはどうなのかと、却って私におたずねくださる。これは必ずしも予期しないことではなく、有難いことではありましたけれど、いささか私はあわててしまった。それにビデオを撮った場所は、本願寺の奥の百花園の池に面した小高い丘の上にある瞰池亭の一室であって、そこには時計はない。普通は京都NHKのスタジオでビデオ撮りをする。そこには大きな時計があって時間の配分ができる。それが、ここでは出来ない。かといって内ポケットから時計をだすのも見苦しい。いよいよ私はあわて気味になった。

そのときである。フト見上げた前門さまのお顔の何と美しく輝いて、ハイリッヒ（浄らか）でおありなさることか。わたしはハッとした。そしてその瞬間、とめどもなくお念仏が、私の口から流れていた。そこにはご開山聖人伝灯のお念仏の大いなる命（いのち）の流れがあった。もうこうなれば、あとはあなたまかせ。そして、あと2分、あと30秒、という合図の紙片が係員から示されたとき、わたしは除ろに最後のしめくくりの言葉仏法讃嘆の言葉を述べさせていただいて、ふかぶかと前門さまに頭をおさげしたことでありました。前門さまも亦。

○　○

しかし、それから数日というものは、はたして全体がうまくいったであろうかという不安・煩悩のはからいで—尤もいつもそうなんですが、ひどく苦しみました。なにしろ前門さまをご相手にしてのこと、それにほんとうにお愧かしいことですが、もしこれがうまくいけば自分の名声があがるという、俗情が、これでもかこれでもかというほどに無尽にわきでてきて、まことにどうにもならぬ煩悩無尽、

煩悩具足のわが身ということを、いやというほどに知らされました。

まことにそれは、聖人のお言葉をいただいて申せば、まことに知んぬ、悲しき哉、俗宗助、名利の大山に迷惑し、（略）恥づべし、傷むべしで、それだけにまた、このときほど、才市の

あさましと
知られた心
仏の心よ

という詩の底にある如来の大悲の仰がれたことはございません。

ところで十二月十三日（日）の朝。わが家のものどもはみんな、午前八時にはテレビの前に集りました。そして偶々法事のため千葉から入洛して来泊していた長女が、画面が対談のところとなったとき、「なんて素晴らしいお顔なんでしょう。このお方が光照師、いや前門さん」と感歎すると、家内も「なんとまあ、かがやいた笑顔でおありなさるんでしょう。それにお言葉のつつましやかでおありなさること—」と讃えながら、「でも、お父ちゃんもご立派よ、いつもと違って落着いていられて。これ、やはり前門さまのお徳なんでしょう—」という。わたしは、その言葉のひとつひとつに肯いて、晴れやかな気持になった。

そしてホッと一息ついたところに、待ちかまえたように方々からお電話をいただく。たとえば川畑愛義先生のごときは、「君、心配していたけど、素晴らしくよかったよ。それにしても前門さん、たいした方だな。お言葉の一つ一つが珠の如くに輝いておられて、今まで君のやった対談中でも最高—」と。そしてそれから二・三日するとハガキ・手紙が届く。その中の榎本栄一さん（詩集『難度海』の著者）のおハガキの一端を、代表として左に紹介させていただく。無断でごめんください。

うまれてはじめて西本願寺（テレビ）へお参りし、光照前門さまと西元先生の御対談を拝聴し、自在無碍なる前門さまの御人柄を目のあたり仰ぎ、紛争など起るよしもない、ゆたかな大きな流れを感じました。たのしい一時間でございました云々

なお感謝感激のあまり、前門さまに直接、思いきってお礼の拙書を呈上いたしたのですが、それに対し、思いがけなくもご親書をいただき、さらにさらに感銘を深くいたしました。しかし、いくらなんでも、その内容を公開することは出来ません。でもその要旨をお伝えすることは、その

事柄からして却って前門さまのお気持に添う所以であろうかとも思われ、又その類い稀なお人柄をほんとうに仰ぐ手がかりにもなろうかと存ぜられますので、あえて申し述べることにいたします。

最初にはまず、「勿体ないお言葉でございまして、それに対しては私は今も、ただ恐縮し慚愧するばかりであります。

しかし私が皆さまにお伝えしたいことは次のことです。それは、ビデオを撮った瞰池亭は、ふだんは宗門内の方の接待所なので、私はわたしの書いた額字のかかげてあるのを我慢しておりますが、しかしこのたびのように私を主として広く全国に公開放送される場合は、他の適当なものと取り換えておくべきでありました。実はあの部屋に着座してビデオ撮りが始まってから、あの額に気づきましたが、もうどうすることも出来ませんでした。まことにお恥しく感じましたという意味のお言葉で、これには私、さらに深く感動させられ、なにか胸がジーンとなるような気持になりながら、（前門さまの書は、おおらかな気品の高いものでありますだけに）、それと同時に自分の俗悪な心情が一そう愧しく省みさせられたことでありました、今も。皆さまお読みいただいてありがとうございました。

歌集含紅集より　　**吉野秀雄**

八幡前の薬舗主人が妻にわれの悔み述べつときくはほほえまし

足萎えて三とせなりけり目の先きの八幡前も足は歩まぬ

噂には死にきと決めて居らめどもうわささるるはありがたき内

世にわれの在りも在らずもひとしけむさりながら今消ゆらくはさびし

才人の何やらいふは聞き飽きぬ鈍きおのれを甘なふならねど

わが命やがて尽きなむさりながらゆるがせにせじよその消ゆる日まで

念仏詩抄

木村無相

ワケわかろうとせず

香師おおせに　　香師—香樹院徳龍師

〃聞けばワケはわかるが
さてさて晴れにくいものは
わがウタガイなり〃

そのウタガイ
晴らそう晴らそうとせずに
ただ六字のオイワレを聞け
ワケわかろうわかろうとせずに
ただ聞けただ聞け
ただ聞きに聞けと——

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

今度の一大事の後生

香師おおせに

〃今度の一大事の後生
オノが善悪のハカライすてて
ただ阿弥陀仏に助けられて
往生するぞと信じたてまつり
念仏申すよりほかなきなり—〃

ただ
アミダ仏に助けられまいらせて

ただただ
アミダ仏に助けられまいらせて

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

今よびたまう

香師おおせに
〝ウタガイはれざるわけに三―
一真実大事のおもいより聞かぬゆえ
二わが心の善悪のみにかかわるゆえ
三如実真実のまことを知らざるゆえ〟

その者をあわれみたまい
その者をかなしみたまい
今よびたまう
ナムアミダブツと――
又よびたまう
ナムアミダブツと――

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

その迷い離れさそうとて

香師おおせに
〝仏の智慧でも神力でも
お慈悲でも
かなわぬものは我々の
業報のナシワザなり
この業のキズナが切れねば
三界の迷いを離れ浄土へ
生きることはならぬ〟

その三界の迷い離れさそうとて
五劫のご思惟　永劫の御修業
お念仏のご成就――

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

だが一トロで言えば

ある人
〝ごめんどうながら
一ト言お聞かせ下され〟
と申しければ香師おおせに
〝仏に成るほどのこと
一トロや二タロに聞かせられようか〟

だが
一トロに云えば
ナムアミダブツ
二タロに言えば
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ナナムアミダブツ

弥陀の誓願フシギ

香師おおせに
〝口に称うる念仏が
如来さまの下さるる
御誓いじや――〟

聖人おおせに
〝弥陀の本願と申すは
名號を称えん者をば
極楽へむかえんと
誓わせたまいたるを
深く信じて称うるが
めでたきことにて
そうろうなり――〟

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

法味その折りく

花田正夫

水の味と塩の味

今度脱水症状がひどく、高熱、下痢が続き食欲が全然なくなり、苦痛の日が続いた時、唯一つ喉をこしたのは真水だけであった。人工の味をつけた飲料は受けつけなかった。

こうしたことから、長崎の高原憲医師の云われた水の味の大切さがすこし知れはじめた。

また数年前、心臓病で入院した時、塩分を禁止されて十日あまりして、初めて許された時の塩のおいしかったことが思い出された。味にも種々あるが食塩の味のよさにはくらべようがなかった。塩分だけは外から採らねばならぬ大切なものということも知らされた。昔武田と上杉（川中島の合戦で有名である）が長い戦争最中にも謙信が敵地へ塩だけは送った幽しい話も思い浮かべた。

水の味と塩の味、平素無事な時は何とも思わずに過ごしているが、こうした機縁からすこし知れはじめたについて、平素平穏な時は、人生で大切なことを見落としていることも強く反省させられた。

明治の傑僧、行誠上人は、若い人々が死を忘れてあれこれと談合しているのを見て〝それは死なぬ人の言うこと〟と一言をもって退ぞけられたと聞いている。最近ではサルトル夫人のボ・ボアールが〝老い〟の題で著書を出版したが、その序文に、フランスでもアメリカでも、老いとか死を書くと、〝人生の恥部にふれる〟と非常に嫌うと書いている。

釈尊は、生・老・病・死を自己の問題とされて入山学道、六年にして三十五才で大覚を成ぜられ〝生死出ずべき道〟を高く掲げられたのである。

それなのにわれわれは、唯たのしく、立派に生きることだけを考えて、老いとか死は自分には来ないことと拒否して、氷上乱舞の危い生活に気づかないでいることも大切なことをとりおとしている一例であろう。

子守り歌とお念仏

かって蓮華谷に池山先生をお尋ねした時の話である。

近所のサラリーマンの主人が調子はずれの歌をうたい続けて行ったり来たりしているので、よく見るとむずかる子供を抱きながら子守歌のかわりに、昔おぼえた単調な歌を続けているのであった。

元来幼い子は寝る時が来ても自分で眠ろうとはしないが身体が思うようにならぬのでむずかるのである。その子を抱いて親が子守歌をくりかえしていると、むずかる身に子守歌が聞こえ、心が二つに分れて自然に空っぽになってやすらかなねむりに入る。これは心理学の常識である。

と話して下さって、静かにいつものようにお念仏していられた。それにつけて、お念仏が煩悩熾盛な私共に絶えず呼びかけられる如来の子守歌であると気づかされた。

歎異抄の十六章に「わろからんにつけてもいよいよ願力を仰ぎまいらせば自然のことわりにて柔和忍辱のこころもいでくべし。すべて往生にはかしこきおもいを具せずしてただほれぼれと如来の御恩の深重なることを仰ぎまいらせば念仏も申され候、これ自然なり、わがはからわざるを自然とは申すなり」とあるのが身について味うことが出来た。

煩悩具足の我等はさるべき業縁の催すままに、煩悩が乱舞してはてしない苦悩が続く。そこで苦から脱しようと種々やって見るが、盤珪禅師の言葉通り「血で血に汚れたものを洗っても、また新しい血で汚れる。煩悩具足の者が煩悩の始末はつかぬ」と。又碧巌録に「瓦をどんなに磨いてもダイヤの光沢は出ない」とあるように、自分で自分の始末がつかないのである。このことをお見抜き下さって、攝取不捨の御手に抱かれて、倦まずたゆまずお呼びかけて下さる如来の子守歌、南無阿弥陀仏が聞こえて来るにつけて、心が二分されて、仏力の自然として煩悩の騒音がやすらかなしずけさに転ぜしめてられるのである。

ところが、とかく我執我慢の自力のはからいのやまぬ身は、仏力の自然として恵まれるやすらぎを目あてとして、自分で出来ないが仏力によってやすらごうと願ってしきりに念仏申す、所謂自力の念仏に走るものである。これは自分の願いをかなえようとして仏力を利用する者で誠に仏への冒瀆である。そこにかしこき思いを具せずして、ただほれぼれと如来の御恩の深重なことを仰ぐとき、自然に念仏も申されるのである。これ全く仏力のひとりばたらきである。

仏声人語

大分以前に、大阪朝日に毎日「天声人語」の標題で釈瓢

哉氏の名文が続いた。その後、足利浄円師は「仏声人語」の題で小品を出版された。

私は最近、この仏声人語ということに心ひかれて、歎異抄などを読むとそこに人間、相対分別の差別の域から出られない者には言えようはずのない金言が随所にきらめいていることに驚かされた。それは全然食欲を無くした時真水だけが喉をとおったように、一大事の問題に当面すると人間のあらゆる言葉がむなしくなって、唯一つ仏のお呼び声だけが身にしんで来るものである。

今ははや語らんとしてことばなし、六字のうちに問いつこたえつ　足利　浄円師

とあるが、義兄のご臨終にあっての歌である。

池山先生の人間としての最後のおことばは

何にも残るものはない、何にも残るものはない、
ただ念仏だけがのこる、ただ念仏だけがのこる
えらいこったよ、ありがたいこったよ。

であった。

西哲のことばに「人は沈黙にかえらねばならぬ。その者にこそ神がことばをかけ給う」とあるのも思い合わされる。

聖徳太子が御家庭にあってつねに「世間虚仮　唯仏是真」と仰言ったことも深く心をうつ。親鸞聖人は「煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのことみなもてそらごとたわごとまことあることなきに、唯念仏のみぞまことにておわします」と太子と同じこころを仰言っている。

そらごとたわごとの身に、まことなる仏声が聞こえて、そこに大きなひかりのもとに、一切が輝いてくるのである。

機法二種深信

法に照らされて機が見え、いよいよ法のありがたさがしらされると、よく聞いているが、具体的にこのことを味わいはじめたのは、全くおそだてのお蔭である。

さて機とは、自分の姿であるが、江戸と背中を一度見て死にたい、と昔の人が云っているように、自己反省によって正しい自己を知ることは出来ない。そこで孔子は、十指の指すところを聞け、と教える。その方がより正確であるが我慢の強い我々には他人の言うことを素直に聞けない。又世間に子を知るは親にしかずと云うように、子の身になって子を理解しようとして下さるのは親だけであるが、そこにも陥井がある。愚愛の煩悩に曇らされて、盲目の愛におちるのである。

最後にのこるのは、仏の御目にうつる自己の姿である。成程自己反省によって自己のことが多少わかるが、それは煩悩具足の自己の全体でなく、また一時的な自己の片鱗に

すぎない、そこには暗い後悔があっても、明るい懺悔はない。自己の全体、そしてそれは遠い昔から未来のはてばてまでも変ることのない自己の姿は、仏眼にうつるものである。

聖人が「煩悩具足の我等はいずれの行にても生死をはなるることあるべからざるを」とか「いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」等々は、仏眼にうつる煩悩具足の私の全体、三世にわたって変ることのない私の実体である

そのことに気づきはじめたのは、例の姥捨山の物語にヒントをうけたのである。世間のならわしのままに老母を山に捨てに行くと、途中でしきりに枝を折って道しるべを母が作っている。子は母がまた帰ろうとしてこんなことをしていると思いこんで、山深くはこんで捨てて帰ろうとすると、母が呼びとめて、「これでお前ともお別れだが、若いお前が道に迷わぬように枝を折っておいたから、無事に帰るように」と言われて、子ははじめて母の真意を知り、同時に自分の不孝さをわびたとある。世間によく知られた話である。

私共は仏が、自分の罪の重さに沈みきって浮ぶ瀬のないことを御見抜き下さって、それを救い遂げなくては御自分は仏にはなれないとの御本願を建立して下さったのである。

そこに試みに四十八願の一つ一つをお誓い下さったみこころを仰ぐ時、自分の姿が知らされるのである。第一の願に、地獄・餓鬼・畜生なき国をつくらんとあるのも、毎日朝から晩まで三毒の煩悩をまき散らして、そのあと始末も出来ないで居る身を憐れまれての願であると知れる。其他、他心智通の願も、自己中心に閉じこもって他人の心を知らず迷惑をかけっ放しでいることを憐れまれての願である。私は五十七歳で亡くなった父をその時悲しんだけれど、それは沢山の子を残して行く父の心を察してからではなかった。父に死なれると自分が困るからで、ちっとも父の身にはなれなかったことを、五十年もすぎた此頃、いよいよ知らされては、この願の心にふれはじめている。

親は子に無くてはならぬことのために苦労する。仏もまた煩悩具足の身、火宅無常の世に処する私共になくてはならぬことのために、五劫の思惟、永劫の修行をお積み下さるのである。私は始め五劫と云い永劫とあると、とても私共の考えの及ばぬ長い月日なので、遠くから聞き流していたが、それは私共の迷いが永くまた罪業が深重なための御苦労であったと知らされた。深い海底は私共が想像出来ぬが、地上の高い山を指差されて、あの山の幾十倍だときくと一寸推測が出来る。如来の御苦労は、私共の罪業が深いのをめやすとして知らされるのである。谷の深きは山の高

きなり、と俚言にある通りである。
つまり、自己の姿、機の真実は、あらゆる自力のはからいをまじえず、如来の本願をおおこし下さった御真意を聞く時、はじめてありありと照らし出されるのである。

甦生のうた

西条八十が、学校を卒えて、一時実業界に入ったことがあるが、彼の性格にもあわぬこととて失敗してしまった。そこで今後どうして生きようかと思案投げ首でトボトボ帰途について、橋の上にさしかかった時、彼の心にヒラメイたのは、彼自身の天分に帰れということであった。その時の歌が有名なカナリヤの歌であった。

うたを忘れたカナリヤは
背戸のお山に捨てましょか
いえ〳〵それはなりませぬ
歌を忘れたカナリヤは
黄金の船に、銀の櫂(かい)
月夜の海に浮かべれば
忘れた歌を思い出す

である。私自身、ともするとお念仏を忘れて迷路にふみこむでいる時、親鸞聖人が同坐して下さって「他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけり」と温い心につつんで共々に本願を仰がせて下さるので、自然に忘れたお念仏が浮かんでくるのである。

あと戻り　あと戻りしてたどるかな
甲斐なきことにこころ迷いて

この歌は、たしか唯円房ゆかりの寺の住職が夢に感得して、近角先生に申しあげたとお聞きするが、先生は、中風になられて以来これをくりかえしお味わいになった。私が求道会館にお伺いした時も、応接間に短冊に書かれていたので心に深く刻まれている。

その時の御講話にも、長男の文常があとを継いでくれると思っていたのに、今度の大戦で芦山で戦死してしまった。文常はこのように立派に浄土に帰ったのに老いぼれたこの病人がまたしても、文常が生きていてくれたらと、思うて甲斐ない愚痴にしずむにつけ、歎異抄九章にひきもどされ〳〵している、とお聞きしている。

又、常音先生が私の病中にわざ〳〵お見舞下さった時、私の一生仰ぎたいお言葉をお書き下さいとお願いした時

またやりそこない〳〵
それだからお呆れないお慈悲でないか

常観言　　常音

と短冊に書いて下さって、これが自分の信後に気づかされた大きな経験であると前置きされた。

実は三十近い日までわからぬ〳〵で苦しんでいた時、兄嫁(あね)から、常音さん〳〵、兄さんはいつも、弟を子のように思ってくらしているが、あれの我慢のやまぬのには困ったものだ、可哀そうなものだと云っていますよ、と聞かされた。その時は、自分には信心がないから兄の言う通りにやっているのに、我慢がやまぬとは、勝手なことを言うと腹が立った。然しその後、物の価値は買い手がつける、自分ではよくしている積りでも兄の目にはそう映るのであろう。それにつけても、もう一緒にくらすのはいやだ、出て行けと云わず、それが可愛想なとは普通の兄弟の情を越えている、ああそれがそのまま聖人のおこころであり、如来のおまことであったと気づき、はじめてお慈悲を喜ぶようになった。

その後兄から、日曜講話の時、三十分ほど前席をせよと云われて、自分の懺悔話をすると、信者の人々が非常に欲んで聞いて下さるようになった。ところが家内が十分に聞いてくれないので、もっと真剣に聞けと云うと、これ以上に真剣になりようがありませんと云い、夫婦の仲もチグハグして来た。又たまに浅草の本願寺に用事があって行っても、名字の僧ばかりと云うようにこちらがへだてると、相手は相手で、信心々々とひとりよがりになってと反駁されるようになった。このように家の中でも、また外部の人々ともやりそこないが続くにつけて、兄は信心一つで立派にやっているのに、自分のような者がいるとかえって兄の邪魔になると思いつめて、或時、ここを出て自分の好きな玩具屋をして何処かで暮らしたいと兄に申出ると、言下に、それでは信仰を聞きなおせと云わずに、

「わかったといってはまたやりそこない
わかったといってはまたやりそこなうそれだから
お呆れのないお慈悲でないか」

と聞いて、現に自分がやりそこなっている身にその言葉が胸をついて、思わず青菜に塩で、そのまま兄にしたがうようになった。このことは自分の生涯で大きな気づきであった、と説明して下さった。

今もこの短冊を仏間に掲げて、やりそこないのやまぬ私への、大きな贈りものとさせて頂いている。

これが私自身の甦生の歌といつも口に誦してはお念仏にかえらされるつけ、歌を忘れたカナリヤの西条氏のうたも心に銘じてくる。

月花に四十九年の無駄あるき　　一茶

俳人一茶は、幼くして母を亡くし、義母にいじめられたが祖母の生きていた間はどうにかすごせた。その後はあまりいじめられるので父が思いあまって江戸へ奉公に出した。幸に文才があって俳諧の道に入り、やがて、月を見、花を見ては句を作り、御師匠と云われるようになった。

然し父が亡くなってからはその遺産について弟仙六と争いが絶えなかった。然し俚諺にも、四十九年の非をさとるとあるように、彼が五十になって、この句をのこして江戸の生活を閉じ、北陸の故郷に帰って、弟仙六とも仲なおりをしてそこに居を定め、妻を迎えた。

これがこのついの住家か雪五尺
名月の御覧の通り屑家かな

と歌い、待望の子宝にも恵まれたけれど、ほどなく死に、

苦の娑婆や　花が開けば開くとて

と云っている。その頃から篤信の父の感化があらわれて仏道に段々心が開いている。やがて

ともかくもあなたまかせの年の暮

とあるように、よきにつけあしきにつけて仏願を仰いで絶対他力の信境に進んでいた。このようになる一番の転機は、五十の頃、であった。

その名號を聞く

真宗の基盤は、成就された名號のいわれを聞くところに信心の華が開き、往生成仏の実を結ぶのである。私はかつて蓮如上人が生涯読みあかぬ書といわれた安心決定鈔を読んで、

往生は成就しけりとよろこびにあふるる弥陀の正覚の声

と腰折一つを書きつけたことがあるが、名號は、大慈大悲の御心から願をおこし行を積まれて、智目なく行足のない身を間違いなく往生成仏せしめずはおかぬとお誓い下されて、すでに成就して下さっているのである。その名號のいわれを聞く一つに、念仏無碍の一道が開けるのである。

だから聖人が「聞というは仏願の生起本末を聞いて疑心あることなし、これを聞と云う」と肝腎かなめを指適下されたのである。即ち仏願は誰のために、何が故におこされたかを聞け、と仰言るのである。その聖人御自身が「弥陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業を持ちける身にてありけるをたすけんと思召し立ちける本願のかたじけなさよ」と

いつも、どこでも、誰にも御述懐下さったのも、仏願の生起本末を仰がれての自然の懺悔であり感謝であった。

私共は種々な仏様の願をきいても、それが私一人のためであった、このどうにもならぬ罪業の身を憐れまれての本願であったと、身一つにいただけずにいるのである。

その仏願はすでに成就されているのである、これから成就しようというのではない。譬えば病気した時、隣家の息子が今医大に入学したから非常に便利になれるというので現在病む身には間に合わない。現に卒業して、何処そこで開業しているのであればすぐ間に合うのである。

大悲大願を名號一つに成就されて、名號一つで必ず往生成仏出来るぞとお呼びかけ下さるのである。そこに私共が加えることも、引くこともいらぬ、名號のひとりばたらきをいただくばかりである。

讃岐の庄松同行に、「信の一念は」と聞くと「たい〳〵するばかり」とこたえているのも、信心の智慧のまる出しである。

（昭和四十七年、一月、病院にて）

間

宮川の**妙忠尼**の臨末の語

「わたしは生涯信心を得たい〳〵と骨折ったが親様がえらいお方で、怪我でもしてはならぬと思召してか、この婆には、とう〳〵信心を得さして下されずに、南無阿弥陀仏様にして下さることにしておくれた。」

○

江州木の浜の**新七同行**

「お前は遠方からわざ〳〵尋ねてきてくれたが、定めしこの新七に変った心があるかと思うて来たのであろう。がわしじゃと云うて更に変った心はないわいな。おまえの心とわしの心と一寸も変りはないわいな。お前のその心がわからなんだら何遍でも相談に来ておくれなよ。

お前のその心でよいのじゃけれど、それを得心してくれぬだけが不足じゃわいな。

この新七は必堕無間という大きな高札おいねて、頭のあがる身ではないわいな。お前やわしのような片輪なものは、有難い信者にはなれぬで、このままで助けてもらおまいか。うまいことじゃ〳〵。うまい身にしてもろうたわいな。」

あとがき

昨年十一月入院、腫瘍の手当をして頂き一応退院いたしましたが、どうも体調が悪く、十二月十九日に再度入院いたしまして、皆様に一方ならぬ御心配おかけ申しながら、歳末歳始の御挨拶もいたさず、謹しんでおわび申し上げます。お蔭様で本年に入りまして順調に恢復し、原稿なども書けるまでになりましたので何卒御休心下さいますように。

御存じの通り腫瘍は十二年目の再発、また心筋コウソクは三十年前の心筋障害が知らぬ間にすすんでいたことが知れました。こんなことで講話なども心臓に負担がかかるのでしばらく休ませて頂かねばなりませんことも御諒承願います。正月生れの私は七十八歳になり釈尊の御年も目前になりました。「ボロ車を革靱で結んで引っ張って貰っている様である」と御晩年の釈尊が阿難に語られたことがわが身に沁むこの頃であります。皆様のお励ましと御念力に支えられながら、一日一日を大切にすごさせていただいて居り、四方八方に合掌の外はありません。

「慈光」も三十四巻になりましたが、私の生命のありますしるしに御手許までおとどけいたします。三十年も続けさせて頂くと、「慈光」が私の身体の一部分になって、月々の発行が私の呼吸と同じように感じております。

今後共によろしくお願い申します。

○　○

池山先生の「ただ念仏して」は、何時拝読しましてもそこに何か新しいものを知らされます。先生がわれひと共にここ一つを充分頂きたいとの願いのこもったもので、御著『仏と人』から再度転載させて頂きました。

井上様の「信と人生」は短波放送された時のお原稿と承りました。真実の信心の実相を明らかに話されております。

西元様の「日記抄」はいつも法味あふれるものであります。井上・西元の両先生に「慈光」にいつも御力添えを頂いており、改めて御禮申させていただきます。

私の「法味その折り〳〵」は、病状ようやくおさまりかけました数日前に心に去来するままを誌しました。病床でのたわごととして御読み下さいますように。

新刊書御紹介

『道』　榊原徳草著、　定価　二千円

発行所、東京都国立市富士見台一丁目七番地一-五-四〇三一　振替・東京七-七五四四五番

樹心社の亀岡邦生さんは、故松本解雄先生に御縁の深いお方です。良書を選んで利害を第二にし、奥さんとお二人でお心合せて御仕事を続けていられます。好漢健在なれと祈念してやみません。

〈おわび〉

木村無相さんはお手紙に　常病無相と署名しておられます。心筋コウソクが持病とあり、わが身に受けとられて、発作のおこらぬよう医師の指導のもとに用心されてのお生活ですが、私も同じ病名をうけました。

講話などは心臓に負担が重くかかりますので、全部休ませていただきます。せめて名古屋の一道会は第二日曜だけにでも出来る時の来ますよう願っておりますが、万事お医者さんの御指図のままにいたしますので、病者の我儘をお諒承願います。

昭和五十七年一月十四日誌す

慈光（第三十四巻　第二号　昭和五十七年二月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

定価　半年　八〇〇円（送共）
一年　一六〇〇円（送共）
編集・発行人　名古屋市南区駈上町二ノ八八　花田正夫
電話八二一局七〇三七番
印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷　坂部光雄
発行所　名古屋市南区駈上町二ノ八八　慈光社
振替口座　名古屋一〇四七〇番
郵便番号四五七